

“ 毎日の食事くらいは全員が食べていけるような世界を実現したい ”



市橋勝先生

社会探究領域 越境文化授業科目群

インタビュアー：北川波留、瀧石一太、山野紗亜耶、Tang Technong

Q 先生の研究内容を教えてください。

研究分野は経済学で、元々は長い間日本の経済を分析していたけど、今は開発経済分野を中心に、途上国の貧困状態をどのようにすれば改善できるのかという研究をやっています。IDEC(大学院国際協力研究科)に所属しているから、そこの学生さんたちと途上国の経済の分析を行っているという感じだね。

Q 市橋先生はどうして経済学を学ぼうと思ったのですか？

僕は出身が北海道の夕張市なんだ。夕張は炭鉱の街。だから近所の人みんな炭鉱で働いていたんだけど、貧しい人が多かった。当時の僕はまだ幼かったけど、

幼心に「なぜお金持ちと貧乏人がいるのか？」と疑問に思っていたんだよね。高校生の頃、僕は哲学や思想が大好きだったんだけど、とある倫理の授業でマルクスとエンゲルスに出会った。そして、彼らが著した『共産党宣言』の中にあつた「社会の土台は経済」という言葉にとっても共感したんだ。それがきっかけで経済にすごく惹かれ、経済の仕組みを学びたくて、大学を目指して勉強した。当時の国立大学の社会科学系学部ではほとんどの先生がマルクス経済学をやっていたことも僕にとっては好都合だったよ。だから大学では『資本論』を通して、マルクス経済学を学んだ。その後、就職先も決まっていなかったから、大学院に進み、オーソドックスな経済学と統計データ等の分析の方法を学んだ。

Q 開発途上国を訪問されるのですか。

そういう場合もあるね。今は、ラオスから留学に来ている学生さんとラオスの孤立集落に行つて、家計調査を行つて、それを元に分析しているよ。この調査データを一次データと言うのだけど、発表されている国勢調査みたいなデータを使う方法もあるよ。学生さんの興味関心に沿つてテーマを選んでいるね。けれど、そもそも総科には経済を教えている先生が少ない上に、産業連関分析や計量的な方法の分析だとかを教えている先生が僕以外にいないから、自然と経済学を志す学生さんは総科生には少なくなるよね。

Q 先生は総合科学部についてどのようにお考えですか。

僕も初めて総合科学って聞いたときは、皆と同じように従来の個別の科学を超えた総合科学的な理念を

追究しているんだと思った。だから、従来の経済学も超えた研究ができるんだろうなと思って、胸に希望を膨らませて総科にきたんだよ。だけど、あれ、違うって思ったんだよ。(笑)

総合科学って口では言っているんだけど、総合科学していないんじゃないかと僕は感じてしまう。総合科学を目指すなら、従来の科学を少しでも超えようとやってもらいたい。少なくとも、僕はそんなことをやりたいと思っている。

Q どのような総合科学部を目指したいと考えていらっしゃいますか。

例えば僕だったら、経済を基盤としていくけれど、それを超えたプラスアルファなことを目指していきたいと思う。でも、総科の学生さんの心持ちも千差万別で、「まあ、いいじゃないですか。総合科学部は4年間教養だけやっていれば、楽でいいですよ。」という学生さんもいて、その気持ちも分からなくもない。その一方で総合科学部に来て、「あれ、違う」となってがっかりしていく学生さんもいる。まじめな学生さんほどそうなる。だけど、基本的には学生さんにもっと意欲的に、枠組みを超えたプラスアルファの研究を目指して欲しいなと思っている。ただ問題があって、経済学にも何百年という歴史があるからそれなりの基礎があって、経済学部に入ると、1,2年で基礎をやって最終的に卒業論文を書いてねとなるわけだよ。これだけでもまともにやると、かなりの勉強量になる。じゃあ、総合科学となると、もっと上を目指さないといけない。もっと勉強しないといけない。ところが、カリキュラムもバラバラだし、何を取ったらいいか分からない状態になってしまう。もし経済学をやると決めたらなったときにカリキュラムを見ても、総科のカリキュラムってバラバラだから積み上げのしようがないとなって、4年生になっても経済学部の4年生の方が曲がりなりにも積みあがっているわけだよ。他の分野にしても、工学部や理学部の学生の方が積みあがっている。こんな風に他学部比べて、4年生になった時に何も積み上がっていないって焦ることになってしまうのが、つまり「総合科学部の悲劇」ってやつですよ。

Q 市橋先生自身の研究のゴールはありますか？

それは貧困の撲滅だよ。経済学って驚くことに、“なぜ貧困が発生するのか”という問いに対して、未だに回答できていないんだよ。多くの経済学者が色々なことを言っているけど、結局のところ分かっていない。貧困が起きた後にどうするべきかについては考えられてはいる。例えばこういうケアをすればいいとか、福祉に力を入れようとか。でも、貧困の発生に関しての統一見解は無いんだよ。意外と僕たちの足元に大きな問題は転がっている。みんなが圧倒的な富を得られるような世界の実現は無理だろうけど、せめて毎日の食事くらいは全員が食べていけるような世界を実現したいと僕は思う。だから経済学に携わってその根本の原因を探っているのだけど、実際は僕の生きているうちに解決しうるような問題でないとも思う。だからこそ、貧困の解決への方向に向かおうとし続けることが大事なんじゃないかと考えながら研究しているよ。



学生運動

Q では、先生の学生時代はどのような感じでしたか？

僕が学生の頃、大学生が社会問題や政治に関心を持つのは当然だと思っていた。でも、周りの学生は「社会って何？」とか「思想？なんか怖いね。」といった感じで、興味が無さそうだったんだよね。社会や政治への無関心さが僕にとっては子供っぽいと感じたから、背伸びの意味も込めて社会に目を向けるようになった。そして社会科学サークルに入って、学生運動を始めたんだよ。ただそこは、主に左翼思想を勉強する場だった。今では左翼思想とは全く異なる思想的地点にいるけど、左翼思想の何が問題なのかを身をもって学べたという意味で、学生運動は非常に良い経験だったと思うよ。

じゃあ逆に君たちにきいていい？どうやったら広島大学が盛り上がると思う？

総合科学部に来て色んな人と関わり合えるかなって思っていたけど意外と話すことができないんです。やりたいこととかを話せるだけの場所が欲しいなと思います。(北川)

そうか、それなら俺が要求してみるよ！なんの権力もないけど(笑)

今、実は大学全体を盛り上げるために、大学のエンターテインメント化を目指しているんだよね。テキサス大学を参考にすると、テキサス大学って球場とかもあってみんな一般市民も試合を見に行ったりできるんだよ。これを広大でもやれないかなって思っているんだ。シャトルバスを走らせてブドウ池でバンジージャンプとか。こういう大学のエンターテインメント化というのは日本じゃまだできていない。どこかがやり始めたらみんなやり始めると思うんだよ。大学って本来は、みんなが来たくなる場であるべきだと思うんだ。単位を取るためだけに大学に行くんじゃないで、本当にやりたいことは何か？本当に楽しいことは何かを考えてみたらどう？だから、やりたくないことをやっている暇はねえぞ。ブルーハーツの『ブルースを蹴飛ばせ』って曲を知っている？「やりたくねーことをやってる暇はねー！」って歌詞なんだけど、あれは名曲。そういうことだよ！やりたいことだけをやればいい。やりたいことをやるために必要なことというのはちょっとやりたくないことだったりするけど、次に進めないからそれはやるんだよ。とにかくやりたくないことをやっている暇はない。



総科の学生に伝えたいこと

僕は総合科学部の特徴は良くも悪くも“自由放任”な所にあると思っている。だからこそ、1年生のうちからやりたいことを決めていた方がいいよ。「あれ？3年生になったけど、何も専門の基礎が身につけていない。」と嘆く学生をたくさん見てきたからね。どの分野に行くにしても、基礎は必ず必要になる。基礎を身につけるにはかなりの勉強量が必要なんだよ。だから、なるべく早い段階で自分のやりたいことを決定して基礎を習う。そうしないと、「教養教育を4年間やって大学生生活が終わりました。」ということになりかねないよ。先生たちから手を差し伸べてもらうのを待つんじゃなくて、どんどん門を叩いて、自分から積極的にアプローチして欲しい。そうやって総科のみんなが自分で決めた専門領域で、総合科学に果敢にチャレンジしていけばいいと思うよ。期待しているよ。



人が命を大切にしたいくなるような環境づくり、 一人では生きて行けないからこそ 支えあうような環境づくり



自然探究領域 自然環境科学授業科目群

海堀正博先生

インタビュアー：黒木渉、内藤涼太、永野葵

Q 先生の研究内容について教えてください

「砂防学」、土砂災害の防止に関する研究をしています。近年九州北部豪雨を始め、西日本や東日本で豪雨によって深刻な土砂災害や洪水災害などが発生しています。そのような時に、崩壊や土石流等によって人々の命が奪われたり、生活場に被害が出ないようにする方策を考える学問・研究分野が砂防学です。「砂」「防」と書きますが、砂を一粒たりとも下流に流さない、ということではなく、土砂災害を防ぐ、ということです。豪雨があると山が崩れたり土石流等が発生したりする。ここまでは自然現象であり、起こるべくして起きています。それらの一部が人の住んでいるところに入ってきて、うまくかわすことができれば、災害はある意味で防げたことになるし、被害を軽減することにも繋がりますので、その方策を考えています。

広島は普段あまり雨が深い地域ではないので、災害に縁がないところだと思われがちです。だから宅地開発でも山裾ギリギリまで家が建てられたりします。もし山崩れが起きると、山裾の人家だと崩壊土砂の威力が強いうちに遭遇してしまうので、小規模な山崩れや土石流でも大きな被害になってしまいます。

土石流のメカニズムなどを調べて家を建てる場所の制限などができたらいいのですが、今はハザードマップで示すことが精一杯です。そこで、役に立つのが総合科学ではないかと思っています。災害時に人々が避難行動をとっていただければいけ

ませんが、それに至るまでの認識や心理などが重要です。なので大学院総合科学研究科の中では「リスク研究プロジェクト」として、心理学や社会学、歴史学など様々な分野の先生方と共同してこのような問題に取り組んでいます。大学院は改組になりますが、「総合科学」の取組のできる総合科学部の存在価値はそういう意味で大きいのではないかと思います。

Q 砂防学に興味を持ったきっかけは？

実は大学入学前は生態学に興味があって、砂防学については全然知らなかったんです。でも大学3年生の時に京都大学の防災研究所の人たちから北アルプスの焼岳での土石流の観測の手伝いに誘われて、夏休みに山小屋に泊まって交代で観測をしました。

8月のある日、土石流が実際に起きました。その頃はまだ「幻の土石流」と呼ばれていた程でうまく撮影することができていなかったのですが、その時には土石流の撮影に成功しました。砂防学もいいなと思った瞬間で、その後、今の道にきました。最初は先生方の研究の手伝いが中心でしたが、色々なところで災害等の調査を行ううちに土石流のメカニズムに興味を持つようになりました。

転機になったのは1987年に広島大学総合科学部に助手として着任し、その翌年の1988年に広島の北西部で土石流災害が起きたことです。加計町(現、安芸太田町)で14人の人が命を落とし、そこへ毎日のように調査に行っていました。地域の被災住民たちは、私の活動を応援してくれていましたし、自分たちで二度と災害が起こらないようにと、難を逃れた要因をメモ書きで集めて冊子を作成しておられました。その人たちとはその後も交流が続き、30年以上経った今でも1人とは交流が続いています。この体験が私の広島での災害調査の第一歩でした。

その後も何回か広島県内で土砂災害が起きるのですが、最初の頃の広島の居住地の多くは土石流や崩壊に対して無防備といっても過言ではないような状態でした。

1999年に広島のニュータウンの周辺で甚大な被害の出る災害が起きました。その前年、オーストラリアに留学していた時、実はハザードマップの関連の研究もしており、ヨーロッパの

国々の防災関係者と意見交換をする機会がありました。日本ではまだ公開されていなかったハザードマップに関しては、その考え方も含めてかなり厳しく意見を言われていました。そのこともあり、教科書(『21世紀の教養2 異文化/1・BUNKA』、浅野敏久他編、培風館)にも執筆していたのですが、1999年の災害後のTV出演の時に、オーストリアのハザードマップの現状や考え方や自分の地域の危険性を住民が知らないのは良くないのではないか、という話をとりあげました。すると、TVが大々的に取り上げてくれ、ハザードマップの公開されていなかったことの問題意識が世間に広まりました。それを受けて、2000年6月に広島市が市内の全世帯にハザードマップを配付したのに始まり、ハザードマップの公開が当たり前の流れに突入して現在に至っています。

ただ、今でも知らない人が多いです。5年前の2014年に起きたいわゆる8.20広島土砂災害の時に、ある被災住民から「こんな図見たことなかったぞ。この地域で土石流なんか起きるなんて誰も教えてくれなかったぞ!」と言われた時はショックでした。もう十数年来、ハザードマップの公開はもちろん、防災関係のさまざまな情報がインターネットも駆使しながら、一般の方々にも伝えられるようにされてきていますので。

Q 砂防に興味を持つ前にさまざまなことに興味があったとおっしゃってたのですが、元々の学部は？

農学部の林学科でした。

元々石や植物にずっと興味持っていました。さらに自分が大学生の時、環境問題が言われ始めた頃だったので、環境保全関係をやりたいな、と思って林学科に入りました。林学の中の山地を研究するところに砂防学などの研究分野がありました。

総合科学部ができた時に、私の前任の砂防学の先生が広島大学に呼ばれて、砂防学研究室を創設されました。1986年に総合科学部の地学系で教員募集があったときに、運よく採用されることになり、1987年1月1日付けでここに来れました。

最初は実験装置を設計・購入して、崩壊発生メカニズムの試験研究をずっとやっていました。しかし、1999年の6.29広島土砂災害を経験して、多くの人々の心を動かさないと、防災に繋がらないことに気がついたんです。だから20年前から、雨の情報を生かした避難システム作りの研究にも着手しました。するとうちの研究室のそのような取組が好評で、そういう研究が色々なところに広がって進んでいます。

中国地方にいるので、土石流や崩壊、地すべりなどと関連した砂防に関することはやったのですが、活火山などこの辺りに

ないものと関連した砂防に関してはほとんどやれていません。学生にもやらせてあげたいと思って、国交省の「キャンプ砂防」という企画に、希望する学生を参加させたりしています。夏休みの間1週間ほど、国交省が希望学生の選んだ全国どこかの事務所における砂防について、行き帰りの交通費だけ自腹ですが、その他は無料で実習してくれるんです。中国地方以外に、北海道や東北、関東、北陸、中部、近畿、四国、九州の砂防とか、活火山や大規模な地すべりなども経験できて、行った学生はたいてい感激して戻ってきます。最近は参加する学生が少なくなっていますが、全国の色んな砂防を観れるし、火山も温泉もあるし、砂防って本当に魅力がいっぱいなんだと感ずることができます。

Q 砂防学における研究の目標を教えてください。

私自身は今砂防学を通じて、人の心をどう動かし、安全確保や命を守ることに繋げていくかをいつも考えています。当たり前ですが、ただ災害が起こった時に命を守ることで良いものではありません。防災の一番の考えは“命を守ること”だけど、それは災害が発生する前の段階から始まっていて、各段階で役割があります。まず災害を未然に防ぐことを考える段階、次に災害が起きている時は被害がこれ以上拡大しないように減災に努める段階、災害後は被災地や被災した人々が“生かされた命を大事にしながら、前向きに歩いていけるように支えるための”復旧・復興の段階、この3本セットで防災はできています。すると防災とは色々な意味で、幸せに生きることができたり、それを追求するということとも関連していると考えることが出来ます。人が命を大切にしたいくなるような環境づくり、一人では生きて行けないからこそ支えあうような環境づくり、防災を通じてそれを実現できるよう試んでいます。

Q どんどころに総合科学部の魅力を感じられますか？

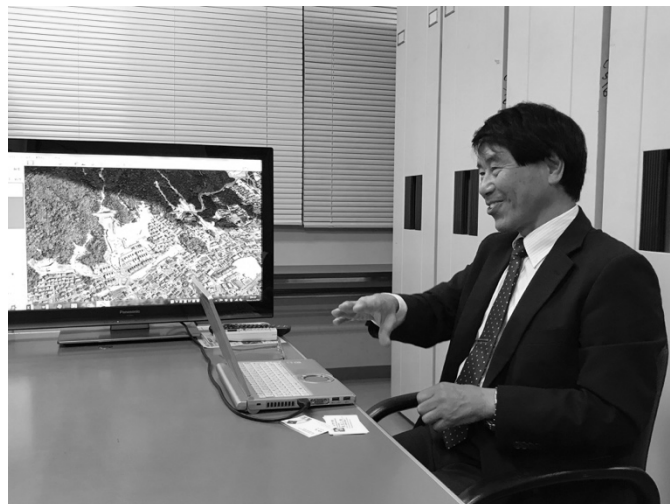
例えば、広島市安佐南区八木地区には蛇王池伝説の碑があります。おそらく土石流を大蛇に例えてそれを退治した伝説が石碑として残されているのだと思います。5年前の2014年8.20土砂災害の時には、その存在が近くに住民には知られていなくて、災害の後に初めてその話が広まって「へ〜」と多くの人を知ることになりました。本当はお年寄りの方は知っていました。でも最近は世代の断絶があって伝わると良い話でも伝わらなくなっている。これはもったいない。結局世代を超えた付き合いや分野を超えた付き合いを大事にできることを含めて、そこに防災が始まっているんです。理系だけの力で防災が十分にでき

るわけではない。色んな分野の人が支え合ってまちづくりをするからこそ、防災にも繋がる強いまちづくりができるのではないかなど、災害が繰り返す度にそう思います。

同じようなことは、もうずっと以前のことなのですが、初めて「たたら製鉄」について知ったときに感じました。教えてくれたのは総合科学部の地域研究をしている先生方でした。中国地方では1,000年以上にわたり盛んに行われていたことやその原材料の砂鉄集めのために、大量の砂を下流に流す営みが続けられていたこと、さらに、その営みを山の奥へ奥へと展開するうちに集落が広範囲に広がってきたことなど、なぜ広島や中国地方が土砂災害の危険箇所となるようなところに多くの人が住むようになってきたのかの一つの原因を考えるきっかけをいただきました。総合科学部という色んな分野の先生方が一堂に会していて、一緒に教育を考えたり研究をし合ったりしているところだからこそ、このような発想に至ることができたと実感しています。さらに言うと、教養の授業を担当する中で、様々な考え方の受講生と意見・コメント・質疑応答などを通じてキャッチボールをしている中で得られるものも多く、これもまた総合科学部だから味わえる環境だと感謝しています。

だから総合科学部の学生みんなに伝えたいです。総合科学部の良さを今は分からなかったとしても、色んな考え方の人との付き合いの中で様々な勉強ができたことの価値を、卒業して何年か経ったら分かってくると思いますよって。

7年ほど前に総合科学部卒業生アンケートというのを自分が担当してまとめてあるのですが、「卒業してすぐは他の学部卒業生に専門性で劣るから肩身が狭かった。でも年を追うごとに専門性はどんどん仕事の中で変わっていくので、その度に自分が総合科学部時代に学んだ広い視野が役に立っています。」という声が増えていました。あれを見たときに総合科学部の考え方は間違いではないという風に思いました。自分も最初は分からなかったけど。そういうところを本当は伝えていきたい。まだ分かってない子がいたとしても、総合科学部は良いよって、まあ騙されてごらんって伝えたいね。だから専門は砂防学だけれど、追求しているのは「人間って何だろうか」というところかなと思います。



総科の学生に伝えたいこと

総合大学である広島大学にはたくさん学部があって、広島大学の学生はその色んな学部の授業に潜り込む権利を持っているようなもんです。自分自身も大学時代にそんな感じであちこち潜り込んでいたからね。ただ面白いと思ったものを学ぶことができる、総合科学部だけでもそういう環境がありますよね。色んなものに興味を持って、そういう自由度が与えられている環境を大事にして活用して欲しいです。学生時代は失敗しても別に構わない。じっくりと回り道しながら過ごすこともお勧めします。

そして、人付き合いを大事にして欲しい。大学の時の友達には財産です。全然分野の違う友達もたくさんいると思う。だから、領域や授業科目群に閉じこもっているとせっかくのチャンスが生かせないと思います。

先ほども言ったけれど、私は総合科学部に來れて、色んな学生や先生に出会えてすごくラッキーだったと思います。おかげで色んなものが見えてきました。色んな意味でみんなも大きなチャンスを持っている。引きこもっていたらもったいないよ、色んな考えの人がいるから人と話すのは基本だよ、と伝えたいです。もちろん書物から得られることもあるけれど、直接話したり遊んだり人と接するのはとても大事ですよ。総合科学部の良いところ、総合大学の良いところを大事に、色んなチャンスを生かして有意義な学生生活を送ってください。

“The Question “WHY” is important to me.”



need a global perspective to achieve that. I think every culture has great insights, so I wanted to have as many good insights and perspectives as possible, trying always to achieve a unifying perspective. I was impressed by Japan’s quick and successful modernization and ability to rebound vigorously, and by its ambitious spirit to learn everything possible from the West. This fervent spirit characterized Japan’s philosophical development. Modern Japanese philosophers often drew upon traditional Japanese ideas, such as Buddhism. In a work of modern Japanese philosophy, one paragraph may be Shinto-inspired, followed by another dominated by Japanese Buddhism, and then another by Indian thinkers, and then maybe Confucianism. All along, the ideas of Kant, Aristotle, Heidegger, Rousseau, and so on are being engaged in the same discussion. It’s a very global approach to philosophy that is hard to get elsewhere. For example, even though European and American philosophy is a very powerful tool to make sense of the world, at the same time, when American and European philosophy appeals to historical examples, Confucianism and Buddhism and other great Asian voices are typically absent. I am so grateful for modern Japanese philosophy because it provides a model of perhaps the most global approach to philosophy available.

Interviewer: Nakamura Wakano, Ida Yumi, and Riho Ishii

Q: What is your research subject?

My research subject consists of the philosophy of religion and comparative thought.

Q: What made you have an interest in philosophy and Japanese philosophy?

Like every human being, the question ‘why’ is important to me. I asked that question a lot growing up. I wondered why there were problems in the world. When I was about your age, I had a major back injury. I was stuck in bed for a long time and I could not sit down for a whole year. I spent a lot of time reading and had even more questions. Amazingly, it was a blessing in disguise. Because of my many questions stemming from this experience, I became a philosophy major. I eventually made Japanese philosophy my primary subject of research, because I am eager to discover what is true in the fullest sense, and it seems like you

Q: What do you think of Japanese culture?

In general, I believe that we can call Japanese culture a “high integrity culture.” So, if you promise to do a certain action or to provide a certain service, you must achieve it according to a high standard. If you do not fulfill your promise or if you do not achieve success, then you must apologize profusely.

Incidentally, the food in Japan is like Japanese philosophy. Consider mentaiko spaghetti (明太子スパゲティ), it's the highly cultivated fusion of Italian and Japanese food, just like the fusion of Western and Eastern thoughts in Japanese philosophy.

Also, in Japan you must work very hard and present the appearance of professionalism. I spent many years of my life studying and teaching in Hawaii and Guam. There, even as a professor, you can come to class in a T-shirt, short pants, and sandals, and the atmosphere is casual. In contrast, the atmosphere in Japan is much more serious, and professors typically aim to appear professional and formal. In Japan, we are often reminded that we should do our best.

Q: What do you do on your day off?

Now, my family is the center of my life, I have two young children and I love to spend time with them. Before having children, playing piano and composing music was my hobby. I was a part of a rock-jazz band in high school. I also liked to swim and lift weights because I like to be physically healthy.

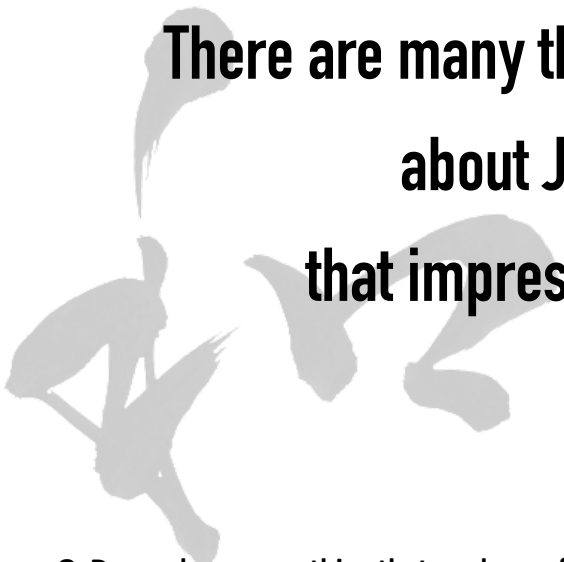
Q: What is one main thing you want to achieve in your study in your life?

I want my children to be physically, emotionally, socially, and spiritually healthy people, and I want them to have happy memories with their father. This actually connects to Philosophy, which often addresses questions like “what are healthy human relationships?”, “what is a good father?”, and so on. So, I see my everyday actions in life, and not just my scholarly thinking, to be intimately connected to what Philosophy really means.

About what I want to achieve—I want to write articles and books and make several presentations that promote a deeper and more global understanding, and correspondingly the importance of approaching philosophy from a global perspective. I also hope that I can encourage people from different religious groups to understand, learn from, and cooperate harmoniously with each other, and to be able to communicate sincerely, humbly, and clearly with each other.



There are many things about Japan that impress me



Q: Do you have something that made you feel inspired in Japanese media?

Certainly. I have enjoyed a lot of Japanese animation, some of which is very philosophically satisfying, such as the work of Hayao Miyazaki of Studio Ghibli. I also deeply enjoy the films of Akira Kurosawa. When I can read, I have enjoyed Japanese literature too; I am deeply impressed with Natsume Soseki, Shusaku Endo, and Ayako Miura, for instance. There are so many things about Japan that impress me. I mentioned the high integrity culture of Japan, which notably includes punctuality. The public transportation system is so good that you can almost always survive easily in Japan without a car. You can just ride the train or the bus. It is a very logical society in a lot of ways. The arts and media of Japan also seem to reflect a sense of sensitivity to the needs of the community and harmonious belonging to it.



DO YOU HAVE ANY MESSAGES FOR US IGS AND ALSO IAS STUDENTS OR NEW STUDENTS NEXT YEAR?



Treasure this precious time in your life. Study and inquire as much as you can now, because it will probably be much harder to do so after you graduate. It will probably be a lot harder to ask questions, and it may be harder to connect with people from all over the world. So really embrace this great gift that you have now. Indeed, so many people around the world wish they could have this very precious gift of a university education. As a scholar and an academic, I, of course, believe that so much of your university treasures are found inside the classroom. But I recognize that there are also many very precious opportunities outside of the classroom too. Treasure your friendships.

On the other hand, because you are in an internationally oriented program, it may be a big challenge because different cultures may have different values and different problem-solving strategies. So, you may sometimes encounter conflict and misunderstandings. Expect some pain. I think that any kind of education always comes with pain. But in IGS maybe there's a little bit of extra pain because you have to learn to communicate with the people who have very different backgrounds.

On the other hand, this is also such a precious opportunity to enrich yourself! In interacting with people from other cultures, you may have some eureka moments when you say, "Ah, now I get it! That point of view works too!", or, "Wow, that is a really good idea in your country! You know what? I hope I can implement that in my country when I go back home!".

You will probably also encounter a lot of crazy things at your young age right now. For instance, romantic relationships and major heartbreak might be right around the corner! Statistics suggest that the first relationship for many of you will not work out. But please don't give up! I was so sure that my girlfriend in grad school was going to marry me, but she broke it off. Part of me then felt like the whole universe came to an end. In retrospect, I'm so grateful that it didn't work out. I'm so glad that I waited a little longer, because I was able to marry the most wonderful woman in the whole world! If you have broken up from a relationship—and many of you probably will—you will definitely cry for a while. But please don't cry forever—anticipate the day when you will stand up again and smile! There is a better tomorrow—keeping this in mind will help you get through your hard time. You will look back and say, "although that was so painful, that hard time produced something precious!". There are definitely going to be ups and downs for you but try to enjoy the whole way through! Treasure every step of your path!